

入れ物と中身との関係で言えば、LPというのが昭和二十六年、日本に登場して、最初はクラシック中心だったと思いますけれど、いったいどの会社がいちばん先にLPを歌謡曲に適用したのか。その資料がみつかりません。ご自分の会社の中でも調べてごらんになると、入れ物と歌との関係が何か一つ出てくるかもしれません。もっとも、最初はレコード会社のほうでは三十センチのLPではなくて、大衆音楽には二十五センチという、一回り小さい、いわゆる十インチ盤のLPをこしらえて、うたのほうを動かさないで入れ物のほうを縮めて、それで対処してきたと思います。そうして三十センチのほうで最初に出たのは何なんでしょうか。前に調べたときに石原裕次郎あたりだったかなという気がしてしょうがないんですが、そういううたい手さんがLPの恩恵に浴する、つまりだが、まだどうい種類（しゅるい）の歌が恩恵に浴するのかわかることは、ひとつ過去のことをお調べになってみたらおもしろいんじゃないかと思っています。

まだ夢みたいな話が続きますけれど、流行歌は今シングル盤の作品単位で運営されております。ベスト・テンに出るのも、レコード大賞がとれるのもシングル盤が売れたからであり、あるいは「紅白歌合戦」に出られるのも、売れたとか売れないとかが全部シングル盤を基盤にして動いているわけです。そういう体制のほうが残っていくのか、それともCDによってシングルがなくなつて体制もまた変わり得なければならぬのか、このへん、そう長い話じゃない、少なくとも十年以内の近未来の話だと思うんです。どんなふうに変わっていくのか、とても興味のあることだと私は思っております。

もちろんビデオ・ディスクについても、ディスクに入り得る情報から言って、シングル盤じゃなくてLPであることは当たり前なことなんですけれど、今の体制の中で歌にビデオ・ディスクというものがどんな影響を及ぼすか、これもどうもまだよく分かっていない……。VTRというものが先にありましたから、ビデオ・ディスクというものの、つまり何かを入れると音と画が出るというものが、衝撃的なカルチャー・ショックを与えないために、今まであんまりたくさん売れていないんだらうと思えますけれども、歌についての影響にしても同じことで、あんまり大きな影響を今のところとはたらきません。歌について、もっとも、ハードがうんとふえたとき、例のピンク・レディーのようなものが登場したとすると、ディスクは売れるし、ああいうタレントが続発するかも……など今、そんなことしか私にはわかりかねます。もっともテレビというものがあれば、歌とうたい手を変えていったんですから、その線での変化というものはずいぶんあるだらうとは思います。実際、録音方式とか技術の進歩というものは、歌より、うたい手のほうに直接大きな影響をしているだらうと思います。例えば機械吹込みから電気吹込みになつて何が変わったかといえば、別段むやみに大きな声を出してがなり立てることが必要じゃなくなつたし、今度はマイクがうんと進歩してくれば、東海林太郎みたいにただつたまま歌わなくても自在に動けるようになるという変化もありましたし、フランク永井という低音歌手が登場したのも、録音技術の進歩が大いに貢献しているような気がしております。